

心
は
花

孤 楽 人

*

わがはいはくつしたである。名前はまだない。

わが家の使用人いわく、くつしたというのは種族名で、彼らはいやしい身分であるから、わがはいの名を口にはできず、「くつした、くつした」と呼ぶのである。そんなかれらの種族名は「人」というらしく、食事、掃除、洗濯の一切を担う。

わがはいほどではないが、まあそれなりに使えるものではあろう。それぞれ、「かな」「りょうた」「さちこ」「父さん」という名を持っている。ここで気づいてしまったのだが、わたはいの名は何であろうか。いやいや、彼らに名を呼ばせるつもりはない。だが、気になるのであるから仕方がない。

春の暖かな昼下がりに、わがはいは名前探しの旅に出た。

*

庭に出てまず最初に出会ったのは「飛びイワナ」という種族の娘たちだ。

「やあ、飛びイワナたちよ」

わがはいが声をかけると娘たちは喜び勇み、我こそはとしゃべりだす。

「あら、くつしたさま」

「わたくしたちに声をかけてくださるなんて」

「くつしたさまがいらしたわ」

「お話、珍しいわ」

「どうしたのかしら」

「まあ、どうしましょう」

十を超える数の娘たちが一斉にチュンチュンと話始めたものだから、さすがのわがはいも聞き取れない。とりあえず、わって入ることにしよう。

「飛びイワナよ、わがはいの名前を知らないかね」

言って、娘たちをみる。

「なにより、長く引き留めたいわ」

「帰っておやつをもってきておもてなししましょう」

「そんなことよりおめかししなきゃ」

「おしゃべりしたい」

飛びイワナたちはなおもおしゃべりを続けている。どうやらわがはいの声は届いていないようだ。

にぎやかな声を後ろに、わがはいは撤退せざるを得なかった。

*

「りょうた」のご学友の住む家までやってきた。ここの家の庭は広く、気持ちいい。ここにはわがはいの友人もいるのだ。

目の前をアジが飛んでいた。思わず手を伸ばして追いかけてまわす。青、より銀色の強いアジを追いかけてしばし。わがはいははっと我に返った。今日はこんなお遊びをしに来たのではない。

「やあ、アジ付き君」

「なんだい。ああ、くつしたか」

ようやく気づいたといわんばかりにのっそりとした動きで振り返る。と同時についさっきまで遊んでいたしっぽのアジが見えなくなる。ちょっとだけ残念に思ったのは内緒である。

「今日は聞きたいことがあってきたんだが。アジ付き君はわがはいの名前を知っているかね？」

「名前かあ。わからないなあ。ごめんよ」

動作と同じくらいゆっくりとくーんと鳴き、しっぽを落とす。こればかりはアジ付き君を責め

られない。丁重に感謝を述べてその場を後にする。

*

公園に向かうと、池の上を黄色いサンマが歩いていた。ちょうどいいので聞いてみよう。

「やあ、黄色いサンマ」

「あーらあらあら、いらっしゃい、くつした」

答えながらも黄色いサンマはすいすいと水の上を進んでいく。

「待っておくれよ、黄色いサンマ。わがはいの名前を知らないかい」

「ええ、ええ存じてますとも。けれども、名前は呼んではいけない決まりなのでしょう？」

指摘されて少しばかり言葉につまる。

「もちろん、そうだととも。けれども、ちょっと呼んでみてはくれまいか？」

「いーえいえいえ。わたくしにはとてもとてもできません。こ、子供たちが待っていますの。失礼しますわ」

黄色いサンマはそれだけ言うと一気にスピードを上げて立ち去ってしまった。思わずちっと舌打ちをしてしまう。

「むう。これだから下々のものは駄目なのだ」

*

次はどこへ行こうかと思案していると、堀の上で同族の兄弟とすれ違った。彼はまだ若いかなかなかはっきりとした物言いをする勇敢な少年だ。彼ならわがはいの身分を気にすることなくずばっと答えてくれるかもしれない。

「やあ、弟よ」

「やあ、兄ちゃん」

「弟よ、わがはいの名前を知らないかい」

「何をいっているんだい、兄ちゃん。兄ちゃんの名前はくつしただろう？」

「いやいや、それは名前ではない。種族名なのだよ」

「種族名？ なんだいそれは」

弟はため息をついて行ってしまった。これはけしからん。わからないことを言われたからといって逃げるのは反則だ。次に会ったらしっかりとお説教せねばならない。

*

結局、名前はわからなかった。肩をおとして家へと帰ってくると、何やら普段より騒がしい。見れば、「姪っ子」が来ているではないか。彼女はわがはいのしっぽを引っ張る怖いもの知らずだ。いつかはしっかりと言い聞かせねばならないが、それは今ではない。みつかる前に安全地帯へとはいったほうがいだろう。

「あ、ネコちゃん！」

目敏い姪っ子が叫んでこちらへと駆けてくる。

「ネコちゃん、ネコちゃん」

「くつただよ」

よくしつけの行き届いた「かな」が注意をする。そう、下々のものはわがはいを名前で呼んではならないのだ。ん？名前？

わがはいは驚いて姪っ子を見た。目の前がぱっと開けた。ちょっと恐ろしい無礼な姪っ子であるが、今は救世主に見えた。

ようやく見つけた答えにわがはいは感極まり涙する。といたいところだが、実は引っ張られているしっぽが痛くて涙がこぼれているだけだったりする。この姪っ子は何とかならぬであろうか。

それはさておき、

わがはいはくつした、名前はネコである。

今日は長い一日であった。そろそろ休むとしよう。